

【作品タイトル】

フリーダニット

【元にした作品のタイトル】

なし

【著者名】

南 伸太郎

【あらすじ】

ある朝、庭の境界線に見覚えのない巨大な石を発見した山岡は、この石を「誰が置いたのか」について推理を続ける。あらゆる可能性を「違う」と排除するが答えは見つからない。山岡の思索の辿り着く答えとは。

【特記事項】（概要、アピールポイント等）

推理小説の形式（フリーダニット）を用いながら、最後には、その前提自体を崩壊させることを狙った実験的な心理サスペンス作品。日常に突如現れた境界線の石をめぐる主人公の「推理」が、最終的に別の人物による「観察記録」であったことが判明するという、観察する者と観察される者の立場が逆転する驚きを読者や観客に提供したい。

【本編の文字数】

三五三三文字

フリーダニツト

ある朝、庭に出て目を疑った。隣家との境界線に、まるでそこにあるべきもののように、大きな石が鎮座しているのを見つけたのだ。丸くも四角くもない、不格好な石である。両腕で抱えても余るほどの大きさで、表面には苔が張り付き、ひと目で古い石だとわかる。まったく見覚えのない石だった。昨日まではなかった。誰かが運び込み、意図をもって置いたに違いない。

山岡は思わず息を呑んだ。境界という場所が、ことさらに意味をもっているようにみえる。所有の主張か、呪術の暗示か、あるいは単なる悪戯か。灰色の表面には苔がうつすら色を変え、微かに息をしているようにもみえる。考えれば考えるほど胸の奥に冷たいものが広がった。山岡は居間に戻り、窓辺に椅子を据える。石がよく見える角度に腰を落ち着け、観察を始めた。

誰が石を置いたのか。この問いを解かずには過ごすことはできない。

第一に思い浮かんだのは隣家の男だ。境界に石を置く理由が彼以外にあるだろうか。几帳面な性格は近所でも評判である。ゴミ出しの分別は完璧で、庭木の刈り込みは定規を当てたように揃っている。境界を明確にしたいと考えても不思議はない。

だがすぐに、山岡は首を振った。あの男は石をぼんと置いて済ませるような人物ではない。境界をはっきりしたいのなら、測量士を呼び、図面を用意し、寸分違わず整えるだろう。あの男なら、その日のうちに役所に届け出て、きっちり白黒つけるはずだ。山岡はノートを取り出し、「隣人、却下」と書きつけた。

近所の子どもかもしれない。彼らはよく境界のあたりで遊ぶ。石を持ち寄って積み上げる姿も見たことがある。城や砦に見立てて石を運ぶこともあるだろう。

だが、あの石は子どもの手之余る。四、五人では持ち上げることも長い距離を移動させることもできまい。違うだろう。

通りすがりの誰かが置いた可能性はどうだろう。夜のあいだに酔っ払いが運び込んだとか、旅の僧が祈りのために据えたとか。そんな妄想も浮かぶ。

しかし、酔っ払いにこれほど正確な位置取りができるだろうか。石は境界線の真上にびたりと鎮座している。酔いどれの仕事にしては几帳面すぎる。そして、旅の僧など、自分で言っておいて何だが、さらにあり得まい。違う。

工事で出た石材か。つい先日まで向かいのアパートが建替え工事をしていて。その業者が仮置きしたのかもしれない。

だが、日中に窓の外から聞こえてきた現場監督のあの男の懇切な指示を思い起こすと、石材を何日も放っておくような者ではないと思われる。これも却下だろう。

行商人か配達員が、荷を休ませるために置いた可能性はないか。ひととき腰を伸ばし、やがてまた担いでゆく。この気温だ。そんな情景も浮かぶ。山岡はさすがにそんなことさえ許さない狭量な者ではない。

いや、石はもう何日も動かないのだ。もしも荷休めだとしても、とっくに消えているはずだ。違う。

あるいは妻か。食事の折にさりげなく訊ねた。「しばらく前から庭に石があるんだ。気づいたか」。妻は箸を止め、窓の外を見て「ふうん」と答えただけだった。

関心も企みも、そこにはみえない。妻であるはずがない。

ふと突拍子もない想像も浮かぶ。もしかすると、かつてこの土地を所有していた地主の亡霊が、境界を訴えるために石を運んだのではないか。そう考えると、石肌にも苔がこびりついていることも説明がつきはしないか。その昔、ここは広大な池であったと不動産屋から説明を受けた。防災地図にも確かにそういう記録がある。池のほとりに鬱蒼と茂る木々の根元に長らく置かれていた様子が目に浮かぶ。往時の地主が、死してなお境界を主張しているわけだ。

いや、しかし、亡霊がわざわざ石を担ぐだろうか。夢枕に立ち、ここはわが土地と囁くほうがよほど霊らしい。違う。

力自慢の犬や猿が戯れに運んだのではないか。動物の怪力は時に人を驚かせる。

だが、石は、まるで手で測ったかのように真っ直ぐに境界へ据えられているのだ。偶然の産物にはみえない。違うだろう。

地震で転がってきたか、風雨で流されてきたか。自然の力を疑うのは悪い筋ではないだろう。

しかし、自然の力で、これほど正確に境界線をなぞるようにして石が運ばれることがはたしてありうるだろうか。まるで石自体が意志をもつかのようにして、境界を指し示しているのだ。あり得ない。

ひよつとすると、いつかの夜に、山岡自身が寝ぼけた拍子に運んだのかもしれない。

しかし、やはり山岡自身が石を運んだとは考えにくい。昨年の冬、腰を痛めて以来、山岡は重いものを持ち上げることができない。寝室のシェルフを組み立てることすらままならず、妻にあきれられたほどなのだ。あの石をどこからか運び込むことなど、到底無理だ。

もし仮に、眠りの中で想像も及ばない力が湧き出て山岡自身が石を運んだとしても、体には何らかの痕跡が残るものだろう。だが、筋肉痛も、擦り傷もない。違う、山岡自身であるはずはないのだ。

寝支度をする妻に「境界に石があるんだ」と再び尋ねた。返事はなかった。一番小さな明かりに調光された寝室のフロアライトが、静かにシエルフを照らす。すぐに妻の寝息が聞こえ始めた。妻との間にもまた、冷たく重い石があるような思いがした。そして、山岡は、それ以上、確かめようとしなかった。

宇宙人の仕業である可能性も検討しておく必要があるのではないだろうか。先日、夜のとぼりが下りる頃、庭のはるか上空で、光る円盤が旋回していたような気もする。東の空だ。隣家との境界の方角である。あの精密な位置取り、境界線上にびたりと鎮座する不自然さは、人間の知恵では説明がつかない。そういうことか。宇宙人の仕業である可能性が排除されるほどの確証はない。空気はねっとり粘り、肌をすり抜け、世界がわずかに歪む。夜中、庭の上空で円盤の光が瞬き、石の軌跡の終点に鎮座する。

しかし、それではあまりに杜撰ではないか。庭に石を置くことを誰にも知れずにやってのけた周到さと、仕事帰りにぼんやりと帰路に着く中年男にその姿を発見された迂闊さとが、どうしても整合的に思えない。そうだ、違うに決まっている。

あるいは石自身が、地下から生えてきたのかもしれない。夜のあいだに地面を割り、境界に鎮座するために植物のように芽を伸ばした。そういうふうには、石に擬態した植物がないとは言えない。ハマミズナ科プレイオスピロス属の多肉種にそのようなものがある。

だがしかし、もし仮にそうだとしても、あの場所にたった一つだけ芽を伸ばしたことの説明にはならない。山岡はまた「植物、違う」とノートに書き加える。

では石そのものが、自らそこに転がってきたのではないか。いずこからやってきたかはこの際、問うまい。石はしばらく前から境界の地中にあり、この数日のあいだ降り続いた雨に洗われ、そこから頭を出した。あるいは、夜のうちに歩いてきたかもしれない。石が歩くかどうかもここで語るまい。荒唐無稽に思えるが、考えうる可能性を一つずつ消しているのだ。残された可能性に、論理的な飛躍がみられるとしても、説得的な説明が足りないとしても、それをもってそれらを捨て置くわけにはいかない。もし仮にすべての可能性が否定されたときに辿り着く結論は、山岡の生活を転覆させてしまうような気がしてならない。山岡にとってそれを自らが引き受けるべきものであると、はっきりと認める決心がつかない以上、そのほかの可能性を残しておくしかないのだ。決して、その結論に至らないように。

こうして山岡は石を見つめ続けている。候補をあげては打ち消し、ノートは「違う」という言葉で埋め尽くされていく。石は境界に鎮座し、微動だにしない。石は静かに、ただ境界の上にある。どこにも行かず、しかしどこから来たのかもわからぬまま。

背後では椅子の引かれる音がし、布が擦れる音や食器が微かに触れ合う音が聞こえる。山岡は振り返らず、石だけを見ていた。山岡もまた石のように窓辺から動けずにいる。臍気ながらある一つの感覚だけが、少しずつ山岡を支配していくのを感じている。窓辺から境界のほうに体を向けて睨み合っているのは、あの石と山岡だけではない気がしてならなかった。

私があの日晩に境界の石を置いてから、三年の月日が経つ。あなたは週末がくるたびに、窓辺に椅子を据えて境界の石を観察している。寝室のシェルフの一番右上の引き出しにしまっているあなたのノートはすでに五冊を数える。あなたは、あなた「が」境界の石を観察していると思っっている。でも本当は、私「が」石を観察しているあなた「を」観察しているのだ。石を凝視するあなたの後ろ姿を、私は今日も観察している。あなたには、私が誰かを言い出すことはできない。